関一「市立商科大学の前途に望む」

写真は大阪市立大学の本部棟である。この大阪市立大と大阪府立大の運営法人を統合するための議案が、先月 2 月 23 日、大阪市議会で大阪維新の会や公明党などの賛成多数で可決された。これにより、府大・市大の統合をめざすという。文部科学省によると、異なる自治体が設立する大学法人の統合は初めて。

いまから 90 年ほど前、大阪市立大の前身である市立商科大学が開校した。当時の関一市長が『大大阪』第４巻４号、1928（昭和３）年４月に「市立商科大学の前途に望む」を寄稿している。これを読むと、大阪市にとって大学がいかに「熱望の的」であったか、大阪市大のリストラ＝事実上の廃止が、いかに浅はかなことかが分かる。全文紹介する。

大阪市が久しく熱望の的であった市立商科大学も、愈この 4 月を以て開校の運びにまで漕付けた。顧れば大学令の改正其他で、この数年来色々の障害に悩まされて来たが、市会の建議、有志各位の尽力と時勢の発展とは、遂に是等の難局を打開して、日本最初の市立大学が商工都市を以て世界に誇る我が大大阪に建設されることになつた。

東京にも京都にも、其他地方の都市にも大学は在るのだから、大阪に大学の一つや二つ出来たからとて、特筆大書する必要はないと思ふ人があるかも知れぬ。それも尤である。その点から言へば、大阪の大学は寧ろ遅過ぎたと言つてよい。往年山紫水明の京都に帝国大学を建設する時、故穂積男爵は京都よりも大阪に大学を設置すべき事を主張された位である。「大学は学問の中心だから、必ずも大都市の甍の中に設ける必要はない、田園清秀の地をトすべきである。」などゝ言ふ議論はもう今日の時勢にはうとい。大都市なるが故に、商賈紅塵の巷なるが故に、大学の必要がある。煙の海、甍の波の中なればこそ学問の中心が必要になつて来るのである。之を独逸の実際に見ても、元来大都市は、一般に学問芸術が発達して居り、美術館、図書館、運動場等の設備が整ひ、尚又多くの展覧会、講演会が開催され、文化的の各種の機関が具備されてゐるから、現代生活を象徴した社会的経済的関係の交錯する大都市の大学に、次第に多数の学生が集中するのは理の当然である。

翻つて大都市自身から考へば、年々著しくなる物質文明の弊のために、これが緩和剤となり防腐剤となる精神文化の中心たるべき大学教育機関の必要が、日と共に痛感される。かゝる意味に於ても、大阪に大学の一つや二つ出来たからと言つて決して誇るに足らないのである。

併し今回の大学は、単に大阪の繁華の地に大学が建設されると言ふのではない。大阪市自身が大学を建設するのである。換言すれば我が大大阪の市民が、その自身の手によつて大学を建設するのである。大阪市民は我が国に於て先例のない、市民の力に依る市立大学の先鞭をつけるのである。この点に我々は市民と共に、多大の誇りを感じ、又其の将来に向つて、健全なる発達を保証する責任があることを覚悟せねばならぬ。

如何に市民の大学だからと言つても、其の経費を市の財政で負担するに止つて、その組織や内容が国立、又は府県立其他の大学と選ぶところがなければ、市立大学は決して吾々市民の誇にはならない。元来大都市大学の主張する処は、その余りに進みすぎる営利的物質勢力のために、これが濫用悪化を防止すべき学問芸術の中心たるべき大学機関を要望するのである。今日世界の大都市、100 万 200 万の人口を有する都市生活には、必ずや不健全なる社会状態が発生しつゝあるもので、之に対してはどうしても神聖なる学問の中心が特に必要である。彼の徳川時代に於ける懐徳堂が、大阪町人の手に依つて維持された事も、思へば甚だ意味が深い。只一つの懐徳堂こそは、実に往年の浪花の町人にとつては大切な「オアシス」であり、精神文化の中心であつたに相異ない。

今日の経済社会状態から考えへると、大阪の如き大都市に於て、特に精神文化の中心を有つことの必要は、何人も異論のないところである。併し此の目的を達するには、従来の如き古い大学の型を模倣したものでは尚不十分であつて、必ず市民の力を基礎として、市民の生活に最も緊要なる専門的の智識を授くると共に、市民としての一般的教養の機関でなくてはならない。勿論これは大都市としての生活上のみならず、国家全体の上から見ても必要な機関であるが、在来の大学よりも、更に一層都市生活と結合した一般的並に専門的の教育機関を設置すべき必要がある。従つて各種の専門学校又は大学卒業後、都市に於て実社会に立つ者に対しても、時勢の変化や、学術の進歩に伴ふ新智識と刺激とを与へる教育機関として、明確に特色ある市立大学を建設する必要が生れて来ると思ふ。単に商科大学を新設すれば、それで結構だと言ふのではない。市の有機組織の中に編込まれた、別箇の嶄然特色ある大学、即ち設立した都市の経済生活、及び精神生活と決して離るべからざる関係を有する学問上の中枢機関としての市立大学を新設しなければならぬ。かくしてこそ大阪市民は軽からぬ特別の負担を敢てして、市民の力による大学設立の先鞭をつけることが出来たと天下に誇り得るのである。

之を要するに、今や大阪市が市立商科大学を新に開校せんするに当つて、よく考へねばならぬ事は。単に専門学校の延長を以て甘んじてはならぬ事勿論であるが、又国立大学の「コツピー」であつてもならぬ。固より大学と言ふ以上は単純なる職業教育だけでは満足が出来ぬ。学問の研究が中心せあると共に、その設立した都市並に市民の特質と、その大学の内容とが密接なる関係を保つべきことを忘れてはならない。其設立都市の有

機組織と其都市の市民生活の内に市立大学が織込まれなければならない。併し決して市民に迎合せよと言ふのでもなければ、早く間に合ふ卒業生を送出せよと願ふのでもない。若しそれだけの目的ならば専門学校で沢山である。市民の市立大学である以上、其所在都市の文化、経済、社会事情に関して、独特の研究が遂げられて、市民生活の指導機関となつて行かねばならぬと思ふのである。大阪市立大学は学問の受売、卸売の市場ではない。大阪市を背景とした学問の創造が無ければならない。此の学問の創造が学生、出身者、市民を通じて、大阪の文化、経済、社会生活の真髄となつて行く時に、設立の意義を全くするものである。

私が茲に一言付加へねばならぬことは、本大学設立の為め大阪高商出身者諸君が特に努力せられたことである。出身者諸君は一方此大学令改正に就て政府当局の理解を得ることを勉められたと同時に物質的にも犠牲を払ふて既に相当の基金を集めて将来の大学の発展に寄与せられんとして居る。尚将来本大学に附設されるべき経済研究所は野村徳七氏の寄付によつて其基礎が定まつて居る。此基金や研究所は本大学の特有の使命を果たすに重要なる役目を帯びて居ることは疑を容れない所であると思ふ。

学問の受売は易いが、学問上の創造はむつかしい。市立大学の色々の障害も除かれて、今日漸くその開校の運びに立到つたが、大学の真の事業は、是からその第 1 歩を踏み出すのである。教育事業に深い理解と後援を惜しまない大阪市民の力によつて、初等教育の各種の学校は、今日他の都市の追蹤を許さぬ程の発達を遂げたが、驚くは市立大学の経営にも、又市民の熱誠な後援を俟つて、天下に範を示すに足る大都市大学の成果を収めたい。而して市民と共に、大阪市がかゝる大学機関を有つことを誇としたいものである。

（2018 年 3 月 25 日）